平成１９年9月号

天草家保通信

熊本県天草家畜保健衛生所
TEL　0969-22-3668　FAX　0969-24-4393
HP)
http://www.pref.kumamoto.jp/construction/section/kaho/index.htm
E-mail) amakusakaho@pref.kumamoto.lg.jp

徐々に涼しくなって、夏の暑さからようやく開放された感がありますが、家畜たちにとっては呼吸器病のシーズン到来です。
今月は豚における秋の飼養管理、呼吸器病について述べていきます。

豚の呼吸器病

・朝夕と日中に比べ温度差が大きくなってくると、肺炎の発生率が上がってきます。
現在様々な呼吸器病があり、すべて病気のせいにしてしまいがちですが、温度差による飼養管理の変化も呼吸器病を引き起こす大きな原因です。
以下の事に注意し、適正な飼養管理を行い、呼吸器病の発生を防ぎましょう。

温度管理	・まずは豚舎の温度を知ることが重要です。特に出生子豚は温度に敏感ですのでしっかりと温度を測ることが大切です。 ・分娩室の温度は１５～２０℃ ・出生時の床面３５℃～４０℃ ・ほ乳期間は徐々に温度を下げ離乳後は３０℃まで温度を上げる。 ・紙マット等をしき、冷気が直接あたらないよう工夫する。
換気	・寒くなると温度中心に考え換気が不十分になりやすい。 ・管理者が息苦しくなったり、目がおかしかったり、喉が痛くなるようであれば、豚にも同じことが起こっています。 ・十分な換気を行いましょう。
湿度	・冬は乾燥してますが、換気の制限等により埃やガスも増えます。 ・豚や寝所にかからないよう細霧や散水を行い湿度の維持、埃の除去をおこないましょう。
飼育密度	・冬場になると暖かくするため豚房に多くの豚を収容する農場が見られます。 ・収容過多では環境は悪くなりますので適正な飼育密度で飼養しましょう。

～豚の呼吸器病～

肺炎を呈する豚の外観

・アイパッチ　目やににほこりが付着
・鼻汁　急性経過では鼻泡、鼻出血を呈し死亡
・削痩　慢性経過では発育不良となる

マイコプラズマ症

自体ではあまり病原性は高くないが、他の菌との混合感染で重篤化
症状：離乳期以降の発咳、発育不良、他の細菌、ウイルス感染で重篤化
対策：離乳豚の飼料にタイロシン、チアムリン、ﾘﾝｺﾏｲｼﾝ等の薬剤を投与
　　ワクチン接種、薬剤添加。オールインオールアウト

豚胸膜肺炎

線維素性胸膜肺炎が主徴。本菌が初めて侵入した豚舎では発症率、致死率とも高く常在化してる豚群では低い
症状：突然の食欲不振、発熱、呼吸困難、チアノーゼ、
　　慢性では湿性の発咳、食欲低下、発育不良
対策：抗菌剤での早期治療、無症状豚にも投与するほうが良い
　　ワクチン接種

パスツレラ肺炎

空気感染の可能性は低い。
病原性の低い株と高い株が存在。低い株では単独では重篤な症状なし
症状：発咳、発熱、食欲不振、急性例では出血病変
対策：抗菌剤での早期治療、無症状豚にも投与するほうが良い

グレーサー病

常在化すると日和見感染し、換気不足や温度変化が大きい時に発症
症状：呼吸器症状の他、関節炎、神経症状、耳の先端のチアノーゼ
対策：ストレス要因の除去、感受性試験による治療

レンサ球菌症

離乳期で多発、衛生環境が優れた農場でも発生、日和見的に感染
症状：発熱、食欲減退、平衡感覚喪失、運動失調、遊泳運動
対策：ストレス要因の除去、予防的薬剤投与

豚繁殖呼吸器症候群
(PRRS)

繁殖豚では異常産などの繁殖障害、子豚は呼吸器症状を示し発育遅延
マイコプラズマ等との混合感染で重篤化
症状：強い腹式呼吸、流産
対策：オールインオールアウト、ワクチン

オーエスキー病

繁殖豚では繁殖障害、子豚は神経症状　死亡率は哺乳期で高い
症状：離乳期以降は明らかな症状示さない。感染初期に呼吸器病
対策：ワクチン

トキソプラズマ

人獣共通感染症
症状：特徴的症状はほとんどないが3～4ヶ月子豚で発熱、鼻汁、目やに
対策：感染初期にスルファモノメトキシン